

頭に奮闘せし勇者四人を送り又青柳、安居を失ひし我部は老將毛利一人あるのみなり。金龜ヶ森の新緑、若き自然の力に包まれて緊張せる静けさの中に我等は猛練習を開始したり。

新しい人々のみだ。そして赤鬼校の誕生への途上にある若々しい力と熱との闘士のみなのだ。

六月二十五日

彦根商業を迎ふるの記

本日午後二時より本校々庭に於て彦根商業と練習試合をなす。戦跡左の如し。

彦 商	彦 中
(No4)長瀬 六—二	(No4)西川 玉
(No3)岡本 六—一	(No3)内川 片
(No2)石橋 六—三	(No2)木谷 村
(No1)宮下 六—五	(No1)毛利 利

記念文庫部々報

(高橋英男記)

部 長	佐竹貞一先生
理 事	及川源治郎先生
委 員	川村三知雄 高橋 英男 深尾 喜隆 久米 宏 圓城 治平 湯淺 誠也 保阪 忠吉 田村 正一 園 凌然 組田 重嘉 山村 義雄

文明の媒介者として最も有力なる者は書籍なり。されど書籍は限りなくして購買の資は限あり。購買の資を有する者少くして之を有せざる者多し。圖書館の設備ある所以なり。さすかに歐米諸國には小なる都會にも必ず圖の設備あらざる無し。文明の普及せらるる宜なる哉。

我日本にても市以上の都會には一つ以上の

以てを除く他は全部初陣にして経験なきと練習不足のため等しく上りしなり。

悲しい哉、敗惨の秋、我等必死に戦ひ而して敗る。嗟乎、天運時を藉さずして華かなりし我が勇士も遂に空しく散り果てぬ。臥薪嘗膽して以て伐足の計を盡さむ。

大阪毎日新聞社主催

全國中等學校準硬球式庭球大會出場之記

おゝ待ちにし濱寺大會は遂に來りたり。

全國中等學校は此の大會を目指して進みつゝあるなり。我が部も亦彦中校友會に萬丈の氣を吐かんとし、陽炎金石をも焙かさんとする灼熱の日、白きライン白銀の如く浮ぶコート上の人となれり。

山口中學何物ぞ、和歌山中學何物ぞ。

(山口) 學 六—一	(我) 毛利 村
(和) 小野田 六—〇	(我) 毛利 利

意氣を以て應戦奮闘せし我が彦中健兒、敵

をよく惱まし心膽を寒からしめしも「天命如何ともする能はず」折からの夕陽英雄を葬ぶに似たり。來年を見よ。と我等は心の中に誓ひき。

回顧

今年の庭球部正選手を一人残す外すべて校外に送り出した我が部先づ主將は若人のかり集めに努力せねばならなかつた。そしてラケットの持ち方足の運び方から指導せねばならなかつた主將の勞を憶ふ。

若人はめき／＼のびた。丁度雨後の筍の如くに。

今年の庭球部は葉落つる秋のそれであつた。負けたと云ふ事は無念である。鷹の千切れる程無念である。けれども吾等はそれは我部の尊嚴と傳統とを侵されたものでないことを確心してゐる。

去るに臨んで殘る庭球部諸君の來年度の奮闘目覺ましからんことを祈る。(終)

ること大なり。吾人は斯言す。彦中健兒の即今の急務は本文庫をして益々發達せしめ、而して益々活用するに在りき。

本年度貸出書籍冊數

四月二十六日放課後委員全部居残り大整理を爲す。

四月二十八日より開館を許さる。

四月分

教	無	無	無	無	五
文	ナシ	1	1	ナシ	2
地	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
英	ナシ	ナシ	2	4	2
數	ナシ	ナシ	3	5	3
雜	ナシ	1	4	ナシ	ナシ
五月分					

教	7	6	4	4	1
文	1	4	16	17	17

部 報

部	地	英	數	文	雜
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
2	1	8	4	4	4
7	3	5	4	11	2
2	2	4	3	8	4

六月分

部	地	英	數	文	雜
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
2	4	7	3	4	2
1	3	3	4	3	3
2	2	3	3	2	2

七月分

部	地	英	數	文	雜
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
2	5	4	3	15	3
1	2	2	2	26	1
2	3	2	4	14	2

九月分

部	地	英	數	文	雜
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
9	6	8	4	29	3
6	3	4	3	31	5
16	3	4	6	16	2

十月分

部	地	英	數	文	雜
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
6	9	12	6	24	3
7	7	5	3	22	15
2	3	2	4	2	1

十一月分

部	地	英	數	文	雜
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
2	3	7	2	23	20
5	10	5	1	13	1

一二三

部	地	英	數	文	雜
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
5	3	4	3	1	3
6	3	3	4	3	4

十二月分(本月二十三日冬季特別貸出ヲナス)

部	地	英	數	文	雜
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
1	3	4	3	1	4
3	3	3	4	3	4

特別夏季貸出

七月十五日より十八日まで四日間(わたり夏季貸出しを行ふ。例により最初の二日を一二・三年生後の二日を四・五年生として貸出す。七月十三・十三日に整理のため特別借覽書籍の返却を請へり。この時未返却の書籍數冊あり。依りてそれらの人々には氣の毒なり。

がら今度の夏季貸出しには貸出しを禁止す。この時の貸出書籍冊數は以外に少なかりき。恐らく貸出し日を知らざりしものありしならん。

冊數次の如し。

部	地	英	數	文	雜
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
6	25	18	22	3	5
1	2	4	19	12	12

所 感

以上の諸表をバツト見れば、文學の部の借覽者が一番多いやうである。併し文學の部が他に比べて多いといふことは通則であらう。年級別に級全体としての傾向を見れば、一二年は自分としては未だ批評出来ない。が三年以上になれば大抵見當がつく、まず現在の三年生は、歴史の方面に興味を持つて居る人が多いやうである。それも純歴史的研究とはちがつて(歴史も文學にはちがひないが)比較文學じみた史實の研究?に興味を持つておる人が多いやうに見うける。

現在の五年生! 自分は現在の五年生は、是を文庫の書籍借用の様子から見れば、何とも云ひやうが分らない。又文庫へ來られる人が少いからかも知れないが。いへば先ずこれも文藝方面の趣向者が多いやうである。終りに今後益々本文庫を活用せられんことを望む。 尙今期間中二三の紛失本を出したることを謝す。

部 報

部	地	英	數	文	雜
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
2	5	4	3	15	3
1	2	2	2	26	1
2	3	2	4	14	2

比較文學(?) 趣向者が多いやうである。



通信欄

東京より

東師 西村榮次郎

中學生時代も今は懐かしき思ひ出さなり此處東都の一角、桐寮に遊かなる天空を仰ぎて腕を扼する僕の覇氣や實に満々たるものがある意氣益々旺盛だ。荒浪の逆巻く人生で大海に雄々しくも漕出んとする若者はなほ且つ意氣の足らざるを歎く。されど僕の周囲、果して能く、滿腔の同情もて僕のこの意氣を迎ふるか？「否」と答へざるを得ざるを如何せん、わが寮園氣（誤解なからんことを、我が校と云ふが如き狹義に非ず社會凡てなり）如何にそれは冷く、素氣無く所謂大人臭きことの甚しき。

實社會に直面して青年は一樣に自覺する。がその自覺たる單に社會的自覺に止り（もつとも之にさへ目醒めず）に濫りに横行闊歩、放

高く、行手に充ち満つる百千の障礙を踏み越へ蹴散し猛進疾驅するは快男兒の一大痛快事ならずや。

青年須く自己を省みて、待むべき唯一の武器、意氣の足れるが上にも足らしめ只管之が振作涵養に努むべしと云ふべきである。

青年よ興に意氣軒昂ならん！意氣消沈、意氣の頓坐行きつまりその時、男子の眞生命は吊鐘鳴り響く中に葬り去られるのだ。嗚呼中學五星期！熱と意氣の結晶！純なる魂は向學に燃え、涙ぐましく眞摯なるその學究！鐵腔喰り熱風渦巻くスポーツの誇、心から怒り、心から喜ぶは中學時代にこそ……。かくて純眞なる青年のハートは意氣に躍し意氣に育まれて行く……。

四年間

三高 居長英三郎

夏休みに歸省して初めて高祖君に會つた時、話が端なくも雜誌のことに及び、自分にも何か書いたら如何と勧められた。殊には原稿紙迄渡されて義理にも書くべきこととなり、他に良い材料も無いので、變化も興味も無い四年間であつたが、その中學時代の思出でも其ければといふことで承諾した。そして今まで一度は試みたいと思つた回顧録風なものをして、——それも便宜上交

通信

歌朗吟、以て青年の意氣を街ふ徒輩も屢々見受けるが、自己を自覺し、自己を顧て、社會的邁進にも缺くべからざる青年の意氣を完備すべく努むる者少きは恨多し。

社會的に自覺して、社會の實情、社會人、自己の社會的地位、具體的進路、手段等を理解し熟慮するの要は論議を俟たないが、此の理解が此の熟慮が如何ばかり多くの青年を失望の深淵に陥れ、幾多の悲劇を醸したか、たとへ然らずとも有爲の青年の多くを、あたかも老成じみた姑息的な不具者になし終ることか、此の點こそ僕等青年の大に警戒し且つ慎重なる考慮を拂ふべきところであらう。此の危機に際して敢然立つて以て刃向ふべきもの、貴き青年の意氣を措いて何かある、何物をも焼き盡さずんば止まざるその意氣！一度殺到すれば萬物靡然として聲亦無し。

意氣は體て意志だ、意氣をかざし意志に頼ち、目指す大理想は漸

友を中心として——一つには敬友高祖君への義理立てをもしたい。

話の順序は入學の初めへ持つて行く。入學試験は嘗て受けた試験と名のつくものゝ最初のものであつた。相當容氣に構へてゐた積だつたが、硯石に結果の影響の大きいものであり準備勉強の爲などもあつて、入學の當初は幾分神經衰弱らしい様子のやうだつた。そして何だか陰氣な気分におそはれて全く憂鬱になつてゐた。當時の日記が一月末から四月中頃迄白いまゝで残つてゐるのは、同じことが今年の入學試験をうけた時にもあつたのもあり、その頃の氣持がうかゞはれぬでもない。丁度四月中旬行はれた氏神のお祭にも、例の如く遊び浮れるといふ晴やかな氣分殆んど無く、獨りじつと坐つてゐたいと思つた。

だが流石に心の何處かに嬉しさがあつたのだらう。杉山といふ先生に入學のよるこびを書いた作文を褒めてもらつたことをおぼえてゐる。祭にも到々すゝめられて兄二人とその時N校へ入つた親戚の人と自分と四人さも學生らしく袴をつけて狂言を見たりした思ひ出もあの年のことだつたらう。

初め一學期ばかりは野球をやつてゐた奥村君が近所で、一緒に入學した中村君と三人、いつも誘つて通つた。入學の當初はさうでもなかつたが、馴れるに従ひ次第に大膽になつて汽車を追つかけて走

るべきが屢々あつた。そんな時は足の早い奥村君の後から重い靴を
がたつかせてついて行くことは確かに苦痛だつた。勿論汽車の時間
に餘裕のある朝もあつて、道草を食ひ乍ら花を摘んだり鞆に載つ
たりしながら通つた。

中村君の外に一緒に小學校から入學した人は兒玉、宮川、中川、古
澤、北村の諸君だつた。兒玉、中川君らも一緒に連立つて、驛から
學校迄の單調な道をもて餘したものだ。荷物に閉口して自分らの一
群はいつも同じ汽車の通學生の殿をつまめた。黒い服の上級生の終
の人がもう招魂社をすぎ御馬部屋の石垣に隠れようとする時分、自
分らはまだこちらの邊り角や橋の上を冗談交りに愚圖ついでゐた。
中川君だけは兄さんもあつて時々大きい上級生と交つて先へ行くこ
とがあつたが、そんな時後からその幼い和服を滑稽に思つて我を忘
れて笑ひあつた。

だが之等の通學友達もその後次第に散つてしまつた。こまごまし
いことは抜きにして、奥村君は一學期の末お父さんの勤先も彦根で
ある都合で芦川の河畔にうつられた。その後は面を會はず、こも、
言葉 exchanged することも少かつた。今は大阪高等商船に在られると聞く
中村君は二年に入つて一學期のみで退學の手續をさられた。北村君
もだつた。中村君はその後家に在られて會ひ語る機会もあるが、北
村君は一家あげて温筆のあたりへ行かれたとかで、その後文通すら

に蒼空を仰いでじつと恍惚境に入つた。眞晝の強い日射を木陰に避
けて辨當をひろげ、草の上を暴れ走つたことなど、今に忘れ得ぬこ
ともである。

二年になつて見もしらぬ顔觸れと同じ組になつた。そして當然であ
るか如く義務であるかの如く級長に祭り上げられてしまつた。さ
いつても別に仕事があるでもなかつた。五月の水上大會の選舉など
に選手をしてゐた上田君に相談を受けた位のものだつた。競漕は自
分らの組が勝つて祝勝と慰安を兼ねる茶話會を開いた。全く無鐵砲
にやつたので定つたプログラムも無く、自分が赤くなつて開會の辭
をやつて後は全く手持無沙汰で大失態だつた。實際言葉通りお茶を
濁してしまつたので、たゞ前からお願ひしておいたのでもあるが當
日臨席を仰いだ故佐久間先生が熊本神風連の話などのも、一時間半
か二時間もして下さつて大助かりだつた。今でも有難いと思つてゐ
る。あんな先生がもつともつとあつて欲しいものだとも思つてゐる。
茶話會はこんな始末であつたが、螢雪會といふ集りがその時茶話
會に幹部級となつて働いてくれた人々によつてつくられ、四年の終
迄何かの形に一つのかたまりであつたことを思へば、決してむだた
とけなしも出来ないと思ふ。織田上田木村らの諸君の提言で——木
村君はその後退き上田君は退學したが——大久保君、高祖君、前川

君は四年迄は一緒だつた。けれどこの四月兒玉君と中川君は
東京へ、私は京都へ、そして宮川君は病床に臥る身となられ、古澤
君一人になつた。

話がやゝ外れた觀があるが、當時はまだ通學友達以外には大した
知己も無かつた。一番頭に残つてゐるのは口分田君だ。同じ組で面
白い善い人だつた。よく講堂の横で英語の嘶の本など讀んでゐた。
成績も良く一學期には一番だつたが、二年になつて何の都合か退學
されて音信ない。

その頃乙組には秀才が多いといふことを屢々聞いた。中井君、阪
本君、赤田君、大久保君らはよく耳にする名だつた。が組を異にし
て赤田君の外には誰も顔を知らなかつた。全年級を通じては今年の
一年は元氣だといふ評判をきいた。必ずしも當つてゐないといふ今でも
思つてゐる。勿論元氣だといふ言葉が曖昧なのだが。言葉の序に——
自分が三度級長をした中に、自分の組の褒められたのは、何時か保
阪老先生が——多分教職を離れられた時か——「この組は大層共同
一致の精神があつてよろしい」といはれたこと一度で、今でも何だ
か心の中に残つてゐる。その他は皆叱られたことばかりおぼえてゐ
る。

八景亭や公會堂の前の芝生はその頃の良遊び場所だつた。時間
の餘る日は誰彼の友と柔らかに芝に落ちる日さしをふみ、又芝の上

君（この人も退學された）兒玉君僕それに北村彌一郎君その他全部
で十六名の會であつた。螢雪會といふのは大久保君の命名で、織田
君大久保君僕らがかゝつて四月末からやつと夏休み明け迄に何とか
會則らしいものを作り上げた。例によつてごてごてと盛上げてあつ
たが、要は雑誌を作ることに歸してゐた。初めは謄寫版でやるつも
りであつたが、此に經費の點で不能となり皆で原稿紙を持ち寄つて一
つに綴り廻覽雜誌で辛抱することにした。何故迄出たか、又内容の
事も手許に残つてゐないのはいへないが、とも角盛澤山で熱心だつ
た。會則の内に「無邪氣なる」創作を募るとあることなどより推し
て全約を知るべしである。初めの中に各人各様の原稿紙で大小も一
定せずまことに興味津々たるものであつた。詩は盛んに書かれたし
小説の様なものも出るし、漫畫があるし、落語の一つ位はあつて意
氣込は素張らしいものだつた。

高祖君は一年時代から一緒に足立先生の初めての作文に二人が
甲上上といふやうな點をもらつて笑はされたものだが、そんな關係
で全然知らぬ仲でもなかつた。併し大久保君とは二年になつてから
の識合ひで雑誌を通じて親しくなつたといつてもよいのだ。が考へ
てみると一年の面も一學期にたつた一言喋つたことがある。

一年の修學旅行は西江州の藤樹先生の墓へ參つたので、初の豫定
が雨で一日後れた事は、同時に自分らと同級に脈々綽名された、耳

を動かして丈の低い愛嬌者の居たことと共に、當時の同級生の記憶にあること、信ずるが、その旅行當日は天氣快晴水天碧青といふので船の工合頗るよく一同大元氣だった。殊に豚さんは柱によち相撲相手を求め船中の人氣を集めてゐたが、自分は餘りのわづらはしさに少し避けて隅の方へ行くと、其處に大久保君が黙々と何かの雑誌をよみふけてゐた。

自分はその雑誌がかれて讀みたいと思つて然も一寸その邊で求められないものだつたので、不躰に「何處で買つたのですか」と尋ねてみた。大久保君は一す顔を上げて、今ではその言葉をおぼえないが、何か一言答へて復讀みふけた。自分らの問答はそれで途切れて約一年間面識もなかつたのである。

大久保君は自分の交際した級友中最も親しく且尊敬に値する友であつた。殊に自分の成績が上級になる程下つたのは君の感化を俟つこと大である。といへばとて別に悪い影響をうけたといふのではない。試験に對する心持が次第にレフアインされたのであつて、一年の時程の猛烈さを失つたのである。併し自分としては決してそれが實力の點に於て悪い方へ行つたとは思はれない。——勿論教室の講義の一分始終をきき——と詰めてこむことを教育の全部と考へ、盲従と日和見を教育の効果とするならば何ともいはない——

かうして自分達の間に雑誌「螢雪」を守ることに無邪氣な努力が

拂はれてゐる時——確かその年の秋——澤效一君が再入學して來た初めての作文には「晩秋の木の中を落葉をふんで歩くとき、病葉がささくさ鳴つて」といふ風に、何でも老巧な筆致で自分の驚異だつた。

澤君とどんな経路で親しくなつたかは今はつきりしない。が澤君もすぐ螢雪會の一員となり、やがて中心となつて私達との交際も次第に濃やかになつていつた。

私達の交際が次第に深くなり、殊に大久保、高祖、澤、兒玉の諸君や僕などいくらか文學の方に趣味の多い連中の間が次第に密になると同時に私達には螢雪會の内容がもつと精練されてよいやうに思はれてきた。そして螢雪から更に延長されたグループを作らうとして「若人」なる雑誌が出來たのである。

「螢雪」は勿論そのまゝにして織田君が主としてやることになり、「若人」の方は大久保君の努力を中心に計畫が進められた。（螢雪の方は三年の終まであつたと思ふ）——謄寫版で「若人」發行の趣旨と原稿募集のことを印刷して配布し、かなりの原稿と賛成者を得た。表紙は鈴木先生の好意で木版にして頂き、三年の時の夏休み前には大体の準備が出來た。そしてその休みの中頃過ぐつて大久保君の手によりプリントされた。

「若人」は創刊號だけでやんでしまつた。内容はかなり澤山で、最

初の計畫の通りさう定期に殊に學業の餘暇を偷んでやるには餘りに重荷に過ぎたのである。したがつて自然立ち消へになつた形だつた。けれども矢張り立ち消へにする氣はなかつた。詩歌雑誌を標榜した

「湖光」が創刊されたのはその冬であつたのである。内容は詩と歌と句などそれに少々は感想文のものも交ぜた。これを發行するには二三の先生方の靈力もあつた。そして印刷の手の多い長い文章は他日若人を復活して載せることにし——實際その時はまだ全然若人を廢るめ意志はなかつたので、殊に大久保君はその考へであつたらしい——一般の原稿を集めた。澤、高祖、大久保、兒玉、私らが同人となり、外に北村彌、漢見、大島、澤田の諸君、下級の人々なども寄稿し、同人達は日曜や土曜の午後を利用して學校の謄寫版を借り一生懸命にやつた。

寒い圖書室や應接室に手をこまかせて編輯し印刷した。殊に同人はみな校友會の仕事にもたづなはつて、さう暇のある身でもなかつたが、丁度油ののりきつた時で興味と喜びが恐しい勢で私達を鼓舞してくれた。

二年と三年の間はかうした中にすぎた。教科書殊に試験への執着が次第に淡くなつた。私達は冷淡に成績表を視流したといへるかもしれない。そして時々一緒にさう氣を上げた。三年になる時私の成績はかなり落ちたが、幸が不幸で成績順番の發表掲がなくな

つた爲又々級長に増がれた。この年は副級長が三人もかはつた。そして又一番困つた組であつたらう。

その時の十一月三日、多賀へ全校の行軍が行はれた。私はその計畫が生徒へ達せられた日缺席したので、當日何も知らずいつもの通りの服装で驛へ出た。がどうだらう。誰も鞆を下げてゐる者はない皆背負袋だ。併し今更仕方もないのでその儘登校して行軍に加はることにした。出發の時になつてみるに服装の違反者は自分一人かと思へば大久保君もその一人だつた。

出發の爲整列してみると二人の違反者か全校の環視の裡に陥らぬ筈はなかつた。二人は某先生に随分叱責をうけて一緒に行くことを許されない程におどしつけられた。がお慈悲さはこれであらう。と角二人は列に加はりえた。併しそれから解散迄の肩見の狭かつたこと、こんなことも後にある先生に聞いたが、あのことが後々まで教員會議の話題に上つたさうで、殊にそれが吾が級及組の不評判になる一因をなし、又當時の擔任の先生までが嫌な思ひを受けられたことなど全く恐縮の至りで、自分はよく級長たるの資格なき人間である、辭職したいと思つたのも同三度ではなかつた。

だがこんなことが重つて却つて私達の親しさを増したのかも知れない。大久保君、澤君、その他の人々と放課後の時間を城に登り、湖邊に佇み、岸川の堤を散策して錦銘の抱負と思想とを交換した。

私達はかく希望と歡喜に緊張し「湖光る」の爲攷々として努めたのである。

四年になると何だか忙しくなつた。來年に受ける試験のこともある。殊に數學に至つては長く放つておいて全く閉口してしまつた。六月頃始められた課外に出ることにしたが、第一回の時刻餘定理が分らない程貧弱な頭だつた。従つて、今までもさうだつたが、雜誌は殆んど澤君、高祖君らに委せきりだつた。

夏休みのしばらくを安土で過した。澤君も來られ静かな山の寺で大久保君と三人話の花が咲いた。月のある夜は山の岩に腰を下して語り合つた。

冬になり「湖光る」を活字刷りにすることにした。大久保君の知己に印刷屋があるといふので計畫は前々から進められた。同人の數も増したが、第一に私達の心配はこの仕事で私達の去つた後迄繼續するかといふことであつた。校友會雜誌の過半が私達の年級の者の原稿によつて埋められたことでも分ると思ふが、又私のみならず他の同人も二學期に入るともうそんなに學校の方に無關心でもなれなくなつた。「湖光る」を活字にすることは十二月に達せられた。美しい表紙をみて喜んだ。がもうその後は出なくなつてしまつた。勿論前の「若人」の如く何時か復活し繼續しようとの意志はあり乍らつい延び／＼になつた。私は可成準備勉強に夢中になつてゐた。そし

てそのまゝ三學期はあわただしく過んでしまつた。

私の書かうとしたことは以上で盡きてゐる。何だか物足りぬかもしれない。實際、殊に後半は雜誌關係のことであり過ぎる。だがもつと何か他の記録によつて詳しく記すならばいさしらず、自分のおぼつかない記憶と亂雑な日記では、これ以上を望むことは寧ろ不可能である。又今までの記述が餘り皮相である憾なきにしもあらずだがこの點については自分が赤裸々な内面迄暴露するには、まだ神の如き人間であり得ないことを遺憾とするのみである。

これを讀んで下さつた方には初年級のごことが割に澤山あるのを氣付かれたかもしれない。それは終の方程ペンを動す意氣が薄らぐのミ、前の部分は休暇中書き後は此方で書いた爲時間的に惠まれなかつたからであるのと、更に上級程人に語りたくない事や心持が多くなることなどである。従つて自分はこのことを氣付きつゝ如何にも致し兼ねたのである。

内容について殊に事實に必ずしも當を得ぬ點がないともいへぬ。そんな所は滿腔の謝意を表する。但し大して他人に迷惑をかける様なことは書かなかつたつもりだが。

書くことは以上で終る。今思ひ出すのは、四月私が去る時大久保高祖、澤三君が私の爲に記念寫眞を撮つて贈つてくれたが、その後——今度の休暇に一緒に會した時、この寫眞が只私への紀念といふ

意味のもののみではなかつたと笑ひ乍ら語つたことである。そして今更の如く私の四年間の生活の上に「偶然」と名づけらるべきものが働きかけてゐることを思ふのである。

ではペンを擱う。赤鬼が極樂の日にめぐり會はんことを望みながら。

本校日誌抄

◎一 月

- 一日 諒闇中につき新年拜賀式舉行せず
- 八日 午前八時三十分始業式
- 十一日 本日午前五時半より武道寒稽古開始
- 廿一日 寒稽古納會、午後一時より開き午後二時半閉會
- 廿六日 山本先生の告別式、同時に松永先生御退職の件發表あり
- 廿七日 午前九時半より村井敦賀第十九聯隊長の查閱あり
- 廿八日 本日より臨時試験開始
- 卅一日 臨時試験終了

◎二 月

- 七日 午後六時四十分より講堂に於て奉悼式ならびに遙拜式を舉行す
- 十一日 諒闇中につき紀元節祝賀式舉行せず
- 廿一日 本日より五年卒業試験開始
- 廿四日 午後一時より校友會委員等の慰勞會あり
- ◎三 月
- 三日 四年生試験終了
- 七日 午前十一時十分より卒業式舉行
- 十日 陸軍紀念日に關し講堂にて寺田少佐殿の講話あり
- 十一日 三年以下質問日休業
- 十二日 三年以下學年試験開始
- 十六日 三年以下試験終了、終業式舉行
- 廿三日 寺田少佐殿の告別式舉行

- 廿六日 入學選拔試験舉行
- 廿七日 入學試験、身体検査、口頭試問行ふ
- 廿八日 身体検査、口頭試問行ふ
- 廿九日 午前十時成績發表

◎四 月

- 七日 午後一時講堂に於て入學式舉行
- 八日 進級生徒對面式、始業式
- 小河内先生、松尾少佐殿の着任式舉行、級長、副級長ならび校友會各部署員選舉行ふ
- 十八日 五年及び二年身体検査あり
- 十九日 五年生の野外演習行ふ
- 二十日 四年三年の身体検査を行ふ
- 廿三日 宇曾川方面へ一日行軍
- 中垣先生の着任
- 廿六日 日課試験行ふ

廿七日 佐藤先生着任

午後招魂社參拜

廿九日 諒閣中につき天皇節祝賀式を舉行せ

ず

◎五月

一日 午前八時三十分大洞内湖辨天下に集

合、創立紀念日に關する式辭を擧げ

引續きボート競漕會開會

をはつて夏原先生の告別式あり

十三日 四五年生野外演習

十七日 鳥生先生の着任式あり

二十日 鈴木先生の告別式あり

廿五日 一二年修學旅行行ふ

廿八日 臨時試驗開始

◎六月

一日 試驗終了、本日より夏服着用

二日 居井先生の着任式あり

四日 本縣學務部長來校

三年以下野外演習

九日 一年身体検査を行ふ

十日 時の紀念日に關し倉橋先生の講話あ

り。をはつて四五年生野外演習あり

廿二日 本日より日課試驗開始

廿三日 試驗終了

◎七月

一日 學期試驗開始

六日 本日より課外授業開始

十一日 一、二年水泳練習開始

短縮授業開始

十八日 午後一時より五年父兄會開催

十九日 五年三組小富士殿夫君昨午後五時半

死去の旨發表あり

二十日 一年生父兄會開催

廿三日 終業式

廿四日 本日より夏中休暇

◎九月

一日 始業式、上松先生御退職の旨發表

三日 寺一先生御退職の旨發表

藤本先生就任の旨發表

五日 本縣學務部長來校

九日 花月先生御退職の旨發表

十日 本日午前四時四十二分内親王殿下御

降臨遊ばさる。午前九時より奉祝の

式を舉行

十二日 上松、寺一、花月先生の告別式舉行

廿二日 第三時限後招魂社參拜

廿八日 本日雨天の爲佐和山神社自由參拜さ

す

◎十月

一日 五年生敦賀兵警見學のため午前七時

十分彦根發にて出發

三日 松尾左馬司先生の着任式あり

五日 九州水害に對する義捐金として職員

生徒より金五拾圓發送す

六日 日課試驗開始

十日 長谷部先生告別式あり

十二日 第四時限目に講堂に於て口腔衛生に

關する講話あり

十四日 四五年發火演習行ふ

廿二日 内田校長福島縣へ轉任

三年野外演習行ふ

廿五日 本日第二時限目に淺井校長着任

講堂に於て就任式あり

廿六日 一、二年野外演習行ふ

◎十一月

四日 杉原先生着任式あり

七日 第五時限目に於て崔相德氏の内鮮融

和に關する講話あり

十一日 午後一時より久野中將の太平洋横斷

飛行に關する講話あり

十四日 朝禮の際松尾少佐殿より來る十七日

教練査閲に關する一般的豫定ならび

に十六日その豫行演習を行ふ旨發表

せらる

十六日 査閲了行演習を行ふ

十七日 午前十時頃長督學官本校を視察せら

る。午前九時四十分より敦賀第十九

聯隊長芦川大佐殿教練査閲を開始さ

る。午後三時十分過査閲終る

十八日 四、五年修學旅行に關し學校長より

注意あり。午後九時二十二分彦根發

にて五年修學旅行隊出發。附添佐藤

松尾岡先生

十九日 午前六時〇四分彦根發にて四年修學

旅行隊出發 附添中川、小河内岡先生

廿一日 三年修學旅行に關し學校長より注意

あり

廿二日 三年修學旅行隊午前六時〇四分彦根

發にて出發 附添堀田、杉本兩先生

廿三日 五、四、三學年修學旅行隊豫定の通無

事歸校

廿五日 學期試驗時間割發表

本日より學期試驗終るまで課外授業

中止 池田先生本日付を以つて奏任

待遇となる

廿六日 本日付を以つて池田先生依願退職

三十日 町田氏一先生着任式あり

桃井先生本日付退職許可せらる

◎十二月

二日 本日より學期試驗開始

六日 上木正一先生の着任式あり

七日 本日試驗終了

明日よりの時間割變更發表

八日 明後日十日米原以北にて虎姫中學校

と對抗發火演習を行ふ事及びそれに

ついで注意あり

九日 佐藤先生の告別式あり

十日 午前九時本校發、發火演習を行ふ

午後四時歸校、分列式の後解散

十二日 池田先生の告別式、小野威材先生着

任式舉行

十九日 成績發表

控室の火爐を開く

二十日 原田種臣先生、小松操先生の着任式

あり

朝禮の際學校長より高等學校入學選

拔試験科目について注意あり

廿一日 本日午後二時半より高商講堂に於て

日比野寛氏の競技方面に關する講演

あり本校生徒聴講

本日より休暇

一五、七九〇

生徒釀金 四、三二、〇〇〇 五百六十人平均十

一ヶ月

學藝部	五〇、〇〇〇	三八、〇〇〇	二九七〇
-----	--------	--------	------

各部役員

合 計 六、三七五、七二六、七三八、五三三

雜 錄

庭球部 部長 中川 先生

理事 野間 先生

委員(五年) 林 俊雄

(四年) 西川 英吉

(三年) 木村 三雄 兒玉 正三

競技部 部長 寺一 先生

理事 長谷部 先生 伊居 先生

委員(五年) 大橋 富造 藤居 直一

漢見 覺了

(四年) 織田 誠一 南城 六郎

瀧上 博

(三年) 上林 道 飯村 天祐

學藝部 部長 堀田 先生

理事 鈴木 先生

委員(五年) 東 清哲

(四年) 上野 正 高田 外次郎

(三年) 鈴木 勲 中村 誠太郎

▽——△
▽——△

輯 餘 雜 筆

高 祖 保

校正も終つた。本年度の本誌はその体裁等
ほとんど僕の獨斷を揮んだ點が多いが、在來
のものに比してその体裁、紙質、内容等の洗
練に於て一頭坤を抜いた出色のものと僕は自
負してゐる。これで他校の誌に伍して堂々た
るものと思ふ。僕の理想の一部がこれで實現
された譯だが、その際に幾多の原稿を割愛す
るの餘儀なきに到つた。責任上僕のもの詩
を却く凡てに亘つて犠牲とした。これ取りも
なほさず部費の年を遂うて減少してきた結果
に他ならない。諸方の有想を求める。

在校生の參考に供する爲、先輩の人々に對
して各地各校の模様、入學後の經驗、その他
種々の感想を求めたが、僅々東京高師の西村
三高の居長二君しか寄稿を頂けなかつた。で
止むなく通信記事として然るべく掲載した次
第。これも二君並に諸方の有想を求めればな

らない。

本誌に鳥生先生の詩文を頂けたことを嬉し
く思ひます。先生に厚く御禮を申し上げます。
春信まだ遠きなや、二月の鋭氣凛として所
え、鈴鹿の春を呼ぶやうにドクトルの庭の梅
も綻び、土ごもりの地蛙はころ／＼と鳴いて
遠い疲れの底から冬眠にをさらばを告げる季
節。われ／＼の手袋も汚れた。五年間のこの
イノセントな感情は、この手袋と共に新しい
風に吹きとばされる時であらう。ながい間わ
が儘を通した僕らに親しく愛撫の掌を以て接
しられた先生達とも早やお別れすべき曙がき
た。曙の光はあかるい。友よ、われ／＼は明
日と云ふ日を翹望して楽しく果立つのだ。
ではさようなら、——さう云つた言葉はあ
まりにも寂しい。併し云はないで別れるのは
一そう寂しいだらう。では元氣に只一言。友
よ、さようなら……。

投稿の注意

○投稿者は所定の原稿用紙を用ひられたい。

○原稿には年級姓名を明記し、各種類に依り
別紙に認め、雅號匿名は許さない。

○點、丸、括弧等は一字に算入する。

○他人の名譽を毀損し、論の政治的時事に涉
るものは採用しない。

○投稿締切期日は必ず嚴守すること。

○原稿の採否は凡て雜誌部々長及び理事の鑑
識の範圍とする。

○原稿の返戻は一切應じない。

明治二十七年五月三十日内務省認可
昭和三年二月二十五日印刷
昭和三年三月一日發行

(非賣品)

發行所 滋賀縣立彦根中學校 校友會

滋賀縣立彦根中學校内

代表者 足 立 熊 雄

滋賀縣彦根五番町六二

印刷者 村 下 斯 康

滋賀縣彦根五番町六二

印刷所 村 下 印 刷 所

滋賀

滋賀縣立彦根高等学校